

仙台教区報

発行所カトリック仙台司教区事務所
 980 仙台市本町一丁目2番12号
 電話〇二二二一22一七三七一番
 編集・発行人 首藤 正義

一年の指針

『年頭司教書簡』にこたえよう

今年の元旦、佐藤司教は「年頭司教書簡」を発表した。
 書簡は、教区大会・福音宣教の必要性・信仰の実践、の三点から成る。

教区大会に積極的参与

司教座が函館から仙台に移って、今年50年を迎える。そのようなかで「仙台教区大会」が9月に開かれる。大会は、半世紀にわたる先人たちの労苦と神のめぐみに対して、教区民あげて感謝の祈りを捧げ、同時に未来への

展望を開くための機会でもある。
 司教は書簡の中で、教区大会が単なる行事で終るものでないこと、教区あげての積極的参与、の二点を強調している。

福音宣教の必要性

一昨年来、福音宣教が積極的に叫ばれている。書簡は国勢調査の速報から、仙台教区内の総人口に対する仙台教区の信者総数を比較している。仙台教区内のカトリック者は総人口の〇・一七%。世帯数は総世帯数の〇・二二%。

この人口比に表われた数字は、福音宣教の必要性を説く「外」からの要請である。

また、「内」からのものとして、教会そのものの本質、キリスト者である、ということからくる福音宣教の使命がある。

信仰の実践

ヤコブの手紙を引用しながら、信仰は実践、

行ないが伴わなければならない、と書簡は強調。具体的な実践として、二つの場が提示されている。一つは司教自身が責任を持つているカリタス・ジャパンの四旬節献金への協力。もう一つは日本に定住したベトナム人の子弟の教育資金への協力。これらの二つは仙台教区として実際の協力をする方針であるので、教区民がその援助に積極的に参与して、ことを書簡は訴えている。

おすび

今回の書簡が仙台教区の中で実を結ぶためには、キリスト者一人ひとりが神のみことばを深く味わい、みことばに励まされ、活かされ、喜びをもって生きることが大切である。

司教様の日程

(1月13日現在)

- 2月2日 一関マリア院落成式
- 4日 イエズス孝女会総長来仙
- 5日 カリタス・ジャパン(東京)
- 6日 常任司教委員会(東京)
- 9日 塩釜教会堅信
- 10日 教区司祭団役員会(仙台)
- 13日 カリタス・ジャパン(東京)
- 14/15日 中央協機構検討委員会(箱根)
- 19日 社会司教委員会(東京)
- 20日 カリタス・ジャパン(東京)
- 24/25日 教区司祭団月例会(仙台)
- 3月3日 教区司祭団役員会(仙台)
- 6日 常任司教委員会(東京)
- 7日 カリタス・ジャパン、中央協財務委員会(東京)

司教座移転50周年記念

《仙台教区大会》

メインテーマ

「明日の教会を

めざして」

期日：昭和61年9月14日(日)・15日(月)
 場所：仙台白百合学園



来日50周年を祝う

―善き牧者愛徳の聖母修道会

去る12月8日、修道院聖堂(仙台)に於て、教会関係者列席のもと、佐藤司教の司式により、来日50周年の感謝ミサが捧げられた。

本修道会は、「聖心の使徒」と賛えられる聖ヨハネ・ユード(一六〇一―一六八〇)によつて、一六六六年、愛徳の聖母修道会が創立された。

以来、本会は、少女・婦人達の改心のために働きを続けて来たが、一八二五年、トゥルの修道院の院長・聖マリア・エウフラジヤは、総会制の認可を聖座に願ひ出た。

その間、多くの困難に出会いながら、神の計画であつたこの制度は、今から一五〇年前一八三五年、教皇グレゴリオ16世により認可され、「善き牧者愛徳の聖母修道会」として国際的に歩み始めた。

フランスに植えられたこの小さな木は、やがて六大陸、世界60余か国に枝をはり、更に総会制となつて百年を経た一九三五年、昭和10年11月に、時のデュマ函館教区長の招請により、カナダ・モントリオール管区の三名の宣教女が来日、仙台聖ドミニコ修道院に寄宿、翌昭和11年、東仙台の農家に移転し、一年後現在の地に移り、本格的な社会事業が開始された。

戦時中、カナダ人シスター達は抑留(畳屋丁教会)され、残された若い三名の志願者が施設に生活する婦人、子供達の生活を守るために、又、召された修道生活の初志を貫くために健

気に奮闘、時を待ちつつ苦勞を重ねた。この事は創立史の中の忘れ得ないひとこまである。戦後昭和20年、修道院と修練院は再開され、本会は第二の出発をなし、鹿児島、大阪の地に修道院を創設。各地に養護施設・幼稚園・学生寮、又、保育所の開設をみた。

その間、ベトナム難民を受け入れたり、土・日曜学校、又、いのちの電話、その救済など、時代の要請に応じながら、日本管区として50周年を迎える事ができた。

尚、日本における会員は現在32人である。30周年を迎えた

スベルマン病院



仙台教区内では唯一のカトリック病院であるスベルマン病院(前田敏行院長)が、昨年創立30周年を迎え、12月12日、仙台市内のホテルで記念式典を執り行った。当日、勤続30年の平岡威氏、小川ふみ子氏、勤続20年の加藤照夫氏、遠藤和子氏、高橋和子氏の5人が表彰された。

同病院は昭和27年、ピエール・ピソネット師(ドミニコ会)が結核に悩む一人の少女を助けたいと、当時仙台に駐留していた米軍およびその家族らに寄付を求めたのが始まり。

昭和30年、訪日中のスベルマン枢機卿の援助を受け、その名をとつて発足。当初は木造二階建の結核病院として小規模なスタートをきつた同病院も、現在では鉄筋四階建。内科、小児科、産婦人科を備え、脳波計、OTスキヤナー、X線TV、超音波診断装置など近代医

療設備を取りそろえるなど、時代に合致した医療体制のもと、キリスト教精神をその真髄とする病院である。

年末まで

アフリカ救援の街頭募金

―仙台地区教会―



飢えのために死んでいくアフリカの子供たちを助けたいと、仙台地区8教会が「アフリカ難民救援」を呼びかけて、さる11月24日から12月22日までの日曜日5回、仙台市の繁華街で街頭募金を行った。一昨年に引き続き行われた今回の募金活動は、前回にもまして、子供たちをはじめ、仙塩地区教会に属するあらゆる会の人たちが街頭に立ち、そして募金する場所には、「教会の看板」である修道女の姿が必ずあつたのが特徴的。また第一回目の際には教区長の佐藤千敬司教も時間をさいて陣中見舞いしてくださつた。

募金の印象としては、「アフリカの子供たちを助けてください。お願いします」と声を合わせ、きちんとそろえて頭を下げて訴える小学生たちの姿に心をうたれたのか、同じ年ごろの子供たちの献金が多かつたように思う。

合計5回の街頭募金の参加延人数は六七〇名で、募金額は一、二七一、二四三円。市民から寄せられた善意の募金は全額、カリタス・ジャパンを通して、エチオピアとシエラレオネの難民に送られた。たいへん寒い中での皆さまのご協力に、深い感謝のうちにご報告申し上げます。

「私の偏見あなたの偏見」

— 指紋押捺をめぐって — を

きいて 荒賀 久仁夫

12月20日(金)午後6時30分から元寺小路教会信徒館で、村首ステファノ(本名エティエンヌ・ド・グドネル)神父を講師に招き、「私の偏見あなたの偏見—指紋押捺をめぐって—」と題する講演会が開かれた。同神父が一昨年10月に外国人登録証への指紋押捺を拒否し、そのため昨年11月に滞在許可期限が切れてしまったことはあまりにも有名であるが、同神父の行動を含めた指紋押捺問題に対する教会内における反応は、「指紋押捺問題自体が難しくよくわからない」という声と、「理由はどうであれ同神父を始めとする指紋押捺拒否者は法律を犯している、罪人」であるから、支持するわけにはいかない。そもそも神父たる者が法律を守らないようでは困る」という声に大別される。しかし前者にとっても後者にとっても、同神父の主張を、一通り聞いてみることはけっして無意味ではないと思う。ところが20日の講演会の参加者のほとんどは、以前から同神父を支援してきた教会外の団体の人々であり、肝心の教会内からの参加者が非常に少なかったのは残念であった。

今回の講演会において強く感じられたことは、村首神父はキリスト者としての深い愛ゆえに指紋押捺を拒否しているのだ、ということである。「我々はキリスト者として、困っている人々や苦しんでいる人々を助けなければ

ならない義務がある。現在の日本社会においては、日本人の心の奥底に根付いている外国人に対する差別と偏見のために、在日韓国人、朝鮮人を始めとする約70万人の外国人が苦しんでいるのだ」という同神父の訴えにまず先に賛同して共に立ち上がらなければならぬのは、キリスト教というすばらしい愛の教えを持つ我々信者であるべきではないのだろうか。ところが前述の通り、教会内では、「理由はどうであれ法律は絶対に守るべきであるから、法律を犯す神父など支援できない」という声が強い。こういった考え方の根底にあるものはキリスト教の教えではなく、儒教思想や戦前の軍国主義教育の流れをくむ日本社会独特の「道徳」であって、「キリスト教信者はまず、道徳」を守る正しい人でなければならず、神父たる者は正しい人の鏡でなければならぬ」と錯覚しているのではないか。聖書のどこにそのようなことが書いてあるのか。むしろイエズス・キリストは律法学者などの戒律主義を徹底的に批判し、愛に基づく業を実践し、そのために大罪人として死刑に処せられたのではないか。

我々は、今いちばん大切なことは一体何なのか、ということをしつかり認識しなければならぬ。その際の判断の基準になるものは、聖書の中のイエズス・キリストの教えのみである、ということも言ってもいい。村首神父の指紋押捺問題を機に、我々は自分の中における「信仰」というものの位置付けを今一度見つめ直す必要があるのではないだろうか。

水沢教会では!!



ヨハネ・ローネル師、地域社会から表彰されるヨハネ・ローネル師は11月20日、水沢の歴史と文化を考える会から文化賞を授賞された。これは胆沢地方の歴史と文化の発掘と継承の中で大きな功績を残し、現在も活躍中の人たちをたたえるもの。

ローネル師は、後藤寿庵を国内はもちろん海外にまで知らせ、且つ、記念ホールを設立し、後藤寿庵の顕彰に尽力したため授与されたもの。(千葉 あつ子)

スイス・アルプスの花写真展を終えて

11月23日から12月1日まで、写真展が水沢教会で開かれた。新しく移転新築された教会を、外へ向けて披露する初めての行事となった。写真展は「岩根を彩る」と題して、スイス・アルプスの花ばかりを50点ほど飾ったが、これはマックス・エンデルレ師が、帰国された折に撮影したもの。

当日はあいにくの雪で、外は一面銀世界となり寒さの続く中で、内外から200名近い人々が訪れて鑑賞した。人々は高山植物の花の美しさに立ち止まり、ひとつひとつ額縁に顔を近づけて見とれていた。速く訪れることのないアルプスの山々に咲く花を、色彩鮮やかに見事に捉えた写真展は、見る人の心を和ませ、楽しませてくれた。新しい教会には寿庵ホールも作られており、広く市民の方々にも近づきやすい、親しみのある教会として開放しているよう願っている。(菊地 栄子)

スカウトは

いま

東仙台教会



仙台の東部の高台にある東仙台カトリック教会に、15年前、少女たちがすこやかな成長を、と願ひ発団したボーイスカウト仙台第三十七団、ガールスカウト宮城第四団、第十四団があります。

この運動の創始者ロバート・ステファンソン・スミス・ペーデン・パウエル卿が願われた教育理念、「幸福を得る真の方法は、他人を幸福にすることである。この世を去る時、あなたが生まれた時よりも世界がもっと良くなっているように努力しなさい」、また、「他の人を幸せにしなさい。そうすれば、あなたも幸せになる。なぜなら、そうすることによつて、あなたは神のみ心を行なっているのだから」と言われ、幸福になるため、そなえよ常に、の精神を生かし、日頃から人格をたかめること、健康を保つこと、技能をみがくこと、人々の役に立つ働きの出来る人に成長するよう願つて活動しているのが、スカウト運動です。

教会とボーイ(ガール)スカウトとのかわりは、ペーデン・パウエル卿の心(教育理念)に教会が感動し、共鳴し、イギリスで司祭がボーイスカウトの隊長となつて少年たちを育てて来たことに始まります。

そして、教会全体が青少年を育成し、成長を見守つて居るので。それが、カトリック

教会のめざす青少年運動と認めることが出来るのです。

現在、東仙台カトリック教会には、ボーイスカウト仙台第三十七団、カブ隊(第一隊・第二隊)、ボーイ隊(第一隊・第二隊)、シニア隊、ローパー隊、団委員、指導者、総人数一三六名。

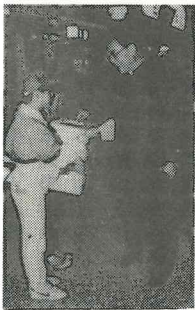
ガールスカウト宮城第四団、第十四団、ブラウニー、ジュニア、シニア、レンジャー、団委員、指導者、総人数一一九名が登録し、活動しています。

ミサの祈りの中で神から愛されていることを知り、その愛にこたえるために、活動において共同体の一員であることを学び、一人ひとりがおかれて居る立場立場で人の役に立つ人間になるための訓練を行なっています。

教会バザーへの参加、アフリカ難民への募金に参加、その他、地域にかかわるプログラムに参加し、自分のまわりから世界へと目をむけ、小さな力が大きな輪になり、少しでも良い世の中になるよう幼い時から平和のために働く人になれるよう、カトリック・ボーイスカウトは願つて活動しています。

活動をとおして、

神のみむねを行なうために



11月22日 救世軍の募金街頭支援
11月22日 救世軍の募金街頭支援
11月22日 救世軍の募金街頭支援

イエズスさまへ

津田 一洋より

(小五ラ・サールホーム)



イエズス様、毎日ぼくたちを見ていて目がつかれませんか?

ゆめでときどきイエズスさまが出て来るんです。ぼくは、新しいのでまだクリスマスまでぎょうじが分かりません。

ぼくは、イエズスさまが、どういうりつばな人だつたか分かりませんがだいたい気もちが分かります。みんながりつばな人になるようにまもつてください。人はまちがつてもはずかしくないのです。人はまちがつてはじめて大人になるんです。ぼくたちは、まちがつてアリアハエをころしているかもしれないので、そういう罪をゆるしてください。

ぼくのお母さんやほかの死んだ人々といつしよにおはなしているんですか?

ぼくのお母さんが死んでも、ぼくはなきまませんでした。なぜかという、イエズスさまが勇気をくれたんです。あるときぼんとうはななくはずなんです、勇気をくれたイエズスさまへかんしゃしています。

いつかへんじをかけたらかいてください。

【編集後記】村首師の「192センチからの眺め」は今回、私の不手際で間に合いませんでした。「スカウトはいま」はいかがなつたでしょうか。教会が育成母体となっているスカウト活動を連載で紹介します。地域に根ざした青少年育成の活動に目を向けてみることも大切なことではないか。今年もよろしく。